

主 題：七つの封印

聖書箇所：ヨハネの黙示録 8章1-6節

いよいよ第七の封印、最後の封印が解かれます。第一の封印が解かれたとき、偽キリストによってもたらされる一時的な偽りの平和があったと学びました。第二の封印が解かれたときには、人々、また、国々に争いが起こることを見ました。第三の封印が解かれたときには、世界的に飢餓が起こると。第四の封印が解かれたときには、地球上の1/4の人々が死ぬということを見ました。第五の封印が解かれたときには、多くの殉教者が起こることを見ました。多くのクリスチャンたちがいのちを落とすのです。そして、第六の封印が解かれました。天地に人類がこれまで経験したことの無い六つの大異変、天変地異が起こることが記されていました。大きな地震が起こり、太陽が暗くなり、月の前面が血のように暗くなり、天の星が、恐らく、大流星群が地上に落ちて来て全世界が大変な被害を受ける、そして、第五番目にこの宇宙が壊れていく様子、第六番目に地震によって地殻変動が起こり、山が沈んだり島ができたりします。このような大変な出来事が起こるということが確かに、聖書の中に記されていました。

さて、このようなことを経験した人々はどうするのか？聖書によれば、彼らは神にお会いして自分の罪がさばかれることの恐れを確かに抱きます。神のさばきが近い、そして、自分の罪がさばかれるという恐れを抱くのですが、彼らは正しい選択をしません。人間的な解決をもってそのさばきを逃れようとします。ほら穴と山の岩間に隠れる、隠れさえすれば神のさばきを逃れることが出来ると彼らは浅はかにも思うのです。また、肉体的な死を自然界に求めます。そうすれば神のさばきを受けないで済むと。愚かなことです。何をしようと、神のさばきを逃れることはできません。自分でいのちを絶とうと、災害によっていのちを落とそうと、寿命によっていのちを落とそうと、すべての人間は神の前に立ちます。そして、さばきを受けます。様々な出来事を通して、神のさばきが近いということを知らされても、そのことに気付いていても、悲しいことに、人々はなおも神に対して心を開こうとしない現実です。彼らはなおも神に心を閉ざして神に逆らい続けているのです。あわれみの神が忍耐をもって一人でも多くの罪人が悔い改めに進むことを望んでおられるにも拘わらず、その神のあわれみに自分をゆだねることなく、神に逆らい続けて永遠の滅びに向かっていく、人間の罪深さ、人間の愚かさです。そのことが確かにこの黙示録に記されていました。

そして、ついに、最後の封印が解かれます。7年間の患難時代はますますその後半に近づいていくのです。第七の封印が解かれることが8章1節から記されていますが、ご覧いただくと、ここに「ラッパのさばき」が記されています。というのは、第七の封印が解かれた後、さばきはこの「ラッパのさばき」しか記されていません。

・ 8：2-6 : ラッパのさばきへの備え

今日、私たちはこのことを見ていきます。

・ 8：7-12 : 四つのラッパのさばき

・ 9章 : 第5, 6のラッパのさばき

・ 11章 : 第7のラッパのさばき

そして、最後の「第7のラッパのさばき」のときに、「七つの鉢のさばき」（15：5-16：1-21）が記されています。そして、「第7の鉢のさばき」の後、主イエス・キリストがこの地上に帰って来られます。これが、この後、聖書が私たちに教えてくれる内容です。今日は、8：1-6の箇所から、「ラッパのさばきへの備え」に関して見ていきますが、特に、ここに記されている四つのこと、第七の封印が解かれてからラッパのさばきが起こるまでの四つの出来事を見ていきます。

☆ラッパのさばきが起こるまでの四つの出来事 8：2-6

1. 静寂 1節

1節「小羊が第七の封印を解いたとき、天に半時間ばかり静けさがあった。」、先ず初めに起こることは「静寂」です。「静けさがあった。」、これは、これまでの六つの封印が解かれたときとは全く違います。これまで、六つの封印が解かれたときは、天で神を称える大合唱があったり、また、人々の苦しみや悲しみ、怒りが地上に溢れていました。たとえば、5章には、神の小羊である主イエス・キリストが巻物を受け取ったとき、5：8-13に記されていましたが、四人の特別な天使たちと私たちクリスチャンの代表である24人の長老たちがこの方の前にひれ伏して賛美をささげる、その賛美に無数の天使たちが加わり、その後にはすべての被造物が加わって大合唱が天で起こる様子が記されていました。第一の封印から第四の封印が解かれたときには、「来なさい」という声をヨハネは聞いています。第五の封印が

解かれたときには、殉教した人々の祈りをヨハネは耳にしました。第六の封印が解かれたとき、大変大きな地震が起こったことが記されていました。そして、その後、再び天で神を称える大合唱が起こっていることが記されていました。

でも、この第七の封印が解かれたときにはそのようなことが一切記されていません。そこには「静けさがあった」、完全な静寂です。ヨハネはその時が「半時間ばかり」と記しています。大切なのは「長さ」ではありません。天で静寂が起こったその理由です。なぜ、静寂が起こったのは？それは、いよいよ神が約束されていたさばきが下るときが来たことを意味しているのです。ですから、このような様子です。約束されていたさばきがこの地上に起こる、それを天使たちが、殉教したクリスチャンたちが固唾を飲んでその様子を見守っている、まさに、その様子がここに書かれているのです。これから起こる出来事を彼らは息を飲んで見ているのです。まさに、「嵐の前の静けさ」と言えるような様子です。この後、大変な出来事が起こって来ます。

最近、この日本でも「竜巻」が起こるようになりましたが、私もアメリカで実際に何回か経験しました。初めて経験したときはいったい何が起こっているのか分かりませんでした。友人がこう言いました。「今ほら風が完全に静まっているでしょ。この後来るよ。」と。確かにその通りでした。翌朝起きてみると、私が住んでいた通りの一本向こうの通りは道の両側の木が根こそぎ倒されていました。その後、大変な被害がもたらされたのです。まさに、そういうことなのです。この静寂の後、神が約束されていたさばきが下るのです。

聖書を見ると、確かに、預言者たちは全能の神のさばきに対して静まるのが私たちの最もふさわしい正しい態度であることを教えています。たとえば、旧約聖書ゼパニヤ書 1 : 7には「神である主の前に静まれ。【主】の日は近い。【主】が一頭のほふる獣を備え、主に招かれた者を聖別されたからだ。」と、また、ゼカリヤ書 2 : 13にも「すべての肉なる者よ。【主】の前で静まれ。主が立ち上がって、その聖なる住まいから来られるからだ。」とあります。主がさばきを下されるとき、ふさわしい態度は沈黙を守ることだと言うのです。ですから、この後、神のさばきが下るわけですが、それにふさわしい態度は天使も救われたすべての者たちも沈黙を守り続けることです。

最初に起こったことは「静寂」であると。

2. 7人の御使いにラッパが与えられた 2節

2節「それから私は、神の御前に立つ七人の御使いを見た。彼らに七つのラッパが与えられた。」

1) 7人の御使い

実は、この「七人の御使い」の前に定冠詞が付いています。ということで、これは「ある特定の天使たち」を指しているのだろうという考えがあります。レオン・モリスという神学者はこのように言います。「定冠詞によって、特定の七人であることが分かる。彼らの名はウリエル、ラファエル、ラグエル、ミカエル、サラカエル、ガブリエル、そして、レミエルである。」と、このように七人の天使たちの名を挙げています。というのは、この名前はユダヤ人の伝承の中に記されているのです。

・タルムード : モーセが伝えたもう一つの律法とされる口伝律法を収めた「タルムード」の中にも天使たちのことがこのように記されています。「ミカエルとガブリエルが天使たちの中では主役であり、往々にして協力して事に当たる。ミカエルはイスラエルを守護する。」と。ですから、いろいろなところにこのような天使たちの名が出て来たり、彼らの働きが記されています。そのことから、この七人の天使たちはこのような名前をもった天使たちであろうという憶測が為されるのです。

・ユダ9 : ミカエルという天使については皆さんもよくご存じでしょう。ミカエルは「御使いのかしらである」と記されています。御使いの中で一番地位が高いのですが、そのことは聖書の中に2箇所にししか出て来ません。ユダの9節と、Iテサロニケ4 : 16です。ユダ9「御使いのかしらミカエルは、モーセのからだについて、悪魔と論じ、言い争ったとき、あえて相手をののしり、さばくようなことはせず、「主があなたを戒めてくださるように」と言いました。」、Iテサロニケ4 : 16「主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、」、

・天使にも位が存在している : このことから天使たちの間にも位が存在していることが教えられています。ミカエルは「御使いのかしら」であると。そのことに関して、ダニエル書10 : 13にこのように書かれています。「ペルシヤの国の君が二十一日間、私に向かって立っていたが、そこに、第一の君のひとり、ミカエルが私を助けに来てくれたので、私は彼をペルシヤの王たちのところに残しておき、」、「第一の君のひとり、ミカエルが」とあり、地位の高い天使のその中の一人が「ミカエル」だと言っている以上、同じような天使が他にもいるということです。ですから、私たちが天使について考えるなら、ユダヤ人たちはこのように信じているし、確かに、聖書には特別な天使たちがいることが書かれています。

それでは、この2節に書かれている七人の御使いとは、今、紹介した名前の天使たちかどうか？よく

分かりません。どちらかというと、ここでヨハネが教えようとしたこと、ここに記されていることは、特別な任務をいただいた天使たちです。もし、名前を知るべきであったなら、ヨハネもその名を記したでしょう。大切なことは、名前を明らかにすることではなく、彼らにどのような任務が与えられたのか？ということです。私たちはそのことを見ていくべきです。彼らに与えられた任務は「ラッパを吹き鳴らすこと」、その大切な任務が神から与えられているのです。

2) 神の御前に立つ

この七人の御使いは何をしていたのか？「神の御前に立つ」と書かれています。神の臨在されているその御座の前にこの七人の御使いが立っていたのです。この「立つ」という動詞の時制を見ると、これは完了形で、どれだけの時間そこに立っていたのかは分かりませんが、ある期間、彼らはそこに立っていたのでしょ。そして、この「神の御前に立つ」ということにはある意味があるのです。それはいつでもその務めを果たす用意があることを意味しているのです。七人の天使たちはいつでも神のみこころを行なう用意をしていたのです。皆さん、憶えておられますか？イザヤが御座に座しておられる神を見たときに、彼はそこで天使を見ました。セラフィムという天使でした。イザヤ書6：2「セラフィムがその上に立っていた。彼らはそれぞれ六つの翼があり、おのおのその二つで顔をおおい、二つで両足をおおい、二つで飛んでおり、」と、罪のない天使がなぜ自分の顔をおおっていたのか？それは「私は神を見る資格がありません」ということです。罪のない天使でも神を畏れているのです。なぜもう二つの翼で自分の足をおおったのか？聖い神の前に立つにふさわしくないということです。そして、残った二つの翼で「飛んでおり」と書かれています。6：3「互いに呼びかわして言っていた。「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の【主】。その栄光は全地に満つ。」と、なぜ、彼は二つの翼で飛び回っていたのか？それは「主のみこころを今すぐ行う用意ができています」ということを意味しているのです。

ですから、8：2に見る天使たちも、何でも神が言われることを今すぐ行いますと、そのように備えができていたことを表わしているのです。先に見たガブリエルのこと、彼も神の使者としてその務めを果たしたことが聖書の中に記されています。皆さんも思い出されるのは、ザカリヤとエリサベツに子どもが与えられると告げたところでしょう。ルカの福音書1：19「御使いは答えて言った。「私は神の御前に立つガブリエルです。あなたに話をし、この喜びのおとずれを伝えるように遣わされているのです。」、神の御前に立っているガブリエルはいつでも神のみこころを行おうとしていた、そして、神からこのようにザカリヤのところに行って喜びの訪れを伝える任務をいただき、彼はその任務を果たしているのです。

ですから、このように言えます。この天使たちは喜んで主に仕えようとしています。そのように望んでそのように行動していたのです。この8：2で神の御前に立つ七人の特別な任務をいただいた天使たちは、いつでも喜んでその働きをしようとしていたのです。

3) 7つのラッパが与えられた

この天使たちに神からラッパが与えられます。2節の後半に「彼らに七つのラッパが与えられた。」と書かれています。「ラッパ」、英語の聖書には「トランペット」と記しています。旧約聖書には「角笛」とも書かれています。同じように用いられたのです。私たちにとって「ラッパ」といっても特別に感じませんが、イスラエルの人たちにとっては大切なものでした。

◎ラッパが吹かれるのは、

・戦いに出るとき、特別な祭りを祝うとき : 民数記10：9－10には「:9 また、あなたがたの国で、あなたがたを襲う侵略者との戦いに出る場合は、ラッパを短く吹き鳴らす。あなたがたが、あなたがたの神、【主】の前に覚えられ、あなたがたの敵から救われるためである。:10 また、あなたがたの喜びの日、あなたがたの例祭と新月の日に、あなたがたの全焼のいけにえと、和解のいけにえの上に、ラッパを鳴り渡らせるなら、あなたがたは、あなたがたの神の前に覚えられる。わたしはあなたがたの神、【主】である。」と書かれています。非常に大切な楽器でした。

・終わりのときに : ラッパがこの七人の特別な天使たちに与えられたのです。何のために与えられたのでしょうか？結論を言うなら、彼らもこれから下される神のさばきに関与するためです。というのは、ラッパはしばしば終わりのときに吹かれるからです。たとえば、主イエス・キリストがこの地上に帰って来られて千年王国を築かれますが、地上に帰って来られる前にも実はラッパが吹き鳴らされることが記されています。マタイ24：31「人の子は大きなラッパの響きとともに、御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで、四方からその選びの民を集めます。」、天と地からクリスチャンたちが主のもとに集められるということです。そして、彼らは千年王国に入っていくのです。その前に確かにラッパが鳴るのです。そのことがこのマタイの福音書に教えられています。

また、空中再臨に関して、Iコリント15：52「終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。」、空中再臨においてラッパが鳴り、その瞬間に私たちはこの罪のからだから解放されて栄光のからだをいただきます。Iテサロニ

ケ4：16「主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、」と、このように教えられています。ですから、終わりのときに確かにラッパが吹かれるのです。空中再臨のときにも、地上再臨の前にもラッパが吹かれます。

・主の日（神のさばきのとき）が来る警告：旧約聖書ヨエル書2：1に「シオンで角笛を吹き鳴らし、わたしの聖なる山でときの声をあげよ。この地に住むすべての者は、わななけ。【主】の日が来るからだ。その日は近い。」とあります。「主の日」が来るから角笛（ラッパ）を吹き鳴らせと言うのです。さばきの日が来るから、その日が近いからと、そのさばきが来る警告のためにラッパを吹き鳴らせと言います。

ですから、この七人の御使いにラッパが渡されたというのは、いよいよ訪れる神の最後のさばき、患難時代の後半です。最後に向かって世は進んでいきます。そのときにラッパが吹き鳴らされ、さばきが下されるのです。このラッパのさばきが起こる前に静寂があることが書かれていました。そして、七人の御使いにラッパが与えられたことが書かれています。

3. ひとりの御使いにたくさんの香が与えられた 3, 4節

三つ目に出て来るのは3-4節に書かれています。「:3 また、もうひとりの御使いが出て来て、金の香炉を持って祭壇のところに立った。彼にたくさんの香が与えられた。すべての聖徒の祈りとともに、御座の前にある金の祭壇の上にささげるためであった。:4 香の煙は、聖徒たちの祈りとともに、御使いの手から神の御前に立ち上った。」

1) もうひとりの御使いが出て来た

この後、「祈り」のことが書かれています。そこでこの箇所からある人は、神と人間との間で祈りを仲介するのはイエス・キリストだから、この「もうひとりの御使い」とはイエスのことではないかと考えます。でも、私たちはそのようには見ません。確かに、ここには名前が出ていません。これがイエスではないと言える証拠は、この後見ていきますが、この「もうひとりの御使い」は人間と神との間の仲介者ではありません。人間の祈りを神のもとに持っていく存在でもありません。彼は人間といっしょに祈りをささげるものです。そのことからこれはイエスではないと言えます。

もう一つ見ていただきたいのは、7：2で見ましたが、「もうひとりの」という形容詞です。そのときにも説明しましたが（10月4日の礼拝メッセージ）、「もうひとり」は「本質的には同じでありながら別のもの」を表わす形容詞です。言い方を変えると、同じ種類でありながら別のものということです。その「アロス」という形容詞が7：2で使われていて、この8：3でも同じ形容詞が使われています。ですから、前に出て来た天使と同じなのです。確かに、旧約の時代において、イエスは受肉される前、人としてこの世に来られる前は、「主の使い」として旧約聖書に何度も書かれています。ですから、もし、この「もうひとりの御使い」がイエスであるとするなら、アロスという形容詞を使うはずはないのです。それを使うことによって、この御使いは先に出て来た御使いたちと同じ種類であると言っているのです。

ですから、ここでもうひとりの別の天使が出て来るのです。

2) 金の香炉をもって祭壇のところに立った

彼は何をするのか？「金の香炉を持って祭壇のところに立った。」と書かれています。

・香炉：香料を加熱して香りを発散させる目的で用いる器です。

・祭壇：一般的には二つの祭壇を考えます。「いけにえをささげる祭壇」か「香をたくための祭壇」か？ここで言われているのは「香をたくための祭壇」です。出エジプト記30章にこの「香をたくための祭壇」の作り方が記されています。約44cm四方の四角形です。1キュビト四方です。1キュビトは約44cmと説明されています。高さは88センチ、2キュビトです。これに使う材料はアカシアの木でなければならないこと、そして、そこに純金をかぶせることが書かれています。四隅には角が付いていて、側面には祭壇を担ぐための棒を通す金環が作られています。このような「香をささげるための祭壇」、それが3節に記されているものです。

これまでのことを整理します。旧約の時代に祭司たちが何をしたのかを説明します。彼らは全焼のいけにえ、また、いけにえをささげる祭壇から燃える炭を取ります。その炭をもって彼らは聖所の中に入ります。そして、その奥、至聖所に近いところ、そこには聖所と至聖所をさえぎるための幕が張られています。その幕の一番前にあるのが香をたくための祭壇です。持って来た炭をその祭壇の上に置きます。その後、そこに香炉を置いて、煙にして、祭司としての務めを果たしたのです。祭司は一日に2回、朝と夕にそのことを行いました。香を神の前にささげるのです。それがここに書かれています。この御使いは金の香炉をもって祭壇のところにやって来たのです。

3) 彼にたくさんの香が与えられた

そうすると、「彼にたくさんの香が与えられた。」と書かれています。祭司たちはそのように香を香炉の

上に乗せて煙にします。でも、ここで言われている「たくさんの香」とはそのような香りのことではありません。この「香」は救われた者たちの祈りを象徴しています。5：8を見てください。ここに「彼が巻き物を受け取ったとき、四つの生き物と二十四人の長老は、おのおの、立琴と、香のいっぱい入った金の鉢とを持って、小羊の前にひれ伏した。この香は聖徒たちの祈りである。」と書かれています。6：9－11にも「9 小羊が第五の封印を解いたとき、私は、神のことばと、自分たちが立てたあかしのために殺された人々のたましいが祭壇の下にいるのを見た。：10 彼らは大声で叫んで言った。「聖なる、真実な主よ。いつまでさばきを行わず、地に住む者に私たちの血の復讐をなさらないのですか。」：11 すると、彼らのひとりひとりに白い衣が与えられた。そして彼らは、「あなたがたと同じしもべ、また兄弟たちで、あなたがたと同じように殺されるはずの人々の数が満ちるまで、もうしばらくの間、休んでいなさい」と言い渡された。ですから、ここで「たくさんの香が与えられた」ということは、聖徒たち、クリスチャンたちの祈りなのです。」とあります。

ですから、ここで「たくさんの香が与えられた」ということは、クリスチャンたちの祈りなのです。だれがこの「香」を、つまり、クリスチャンたちの祈りをこの御使いに与えたのか？3節に「たくさんの香が与えられた」と受け身で書かれています。実は、この「与えられた」ということばは黙示録にずっと出て来ます。

6：2、4、8、11「2 私は見た。見よ。白い馬であった。それに乗っている者は弓を持っていた。彼は冠を与えられ、勝利の上にさらに勝利を得ようとして出て行った。」「4 すると、別の、火のように赤い馬が出て来た。これに乗っている者は、地上から平和を奪い取ることが許された。人々が、互いに殺し合うようになるためであった。また、彼に大きな剣が与えられた。」「8 私は見た。見よ。青ざめた馬であった。これに乗っている者の名は死といい、そのあとにはハデスがつき従った。彼らに地上の四分の一を剣とききんと死病と地上の獣によって殺す権威が与えられた。」「11 すると、彼らのひとりひとりに白い衣が与えられた。そして彼らは、「あなたがたと同じしもべ、また兄弟たちで、あなたがたと同じように殺されるはずの人々の数が満ちるまで、もうしばらくの間、休んでいなさい」と言い渡された。」

7：2「また私は見た。もうひとりの御使いが、生ける神の印を持って、日の出るほうから上って来た。彼は、地をも海をもそこなう権威を与えられた四人の御使いたちに、大声で叫んで言った。」

9：1、3、5「1 第五の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、私は一つの星が天から地上に落ちるのを見た。その星には底知れぬ穴を開くかぎが与えられた。」「3 その煙の中から、いなごが地上に出て来た。彼らには、地のさそりの持つような力が与えられた。」「5 しかし、人間を殺すことは許されず、ただ五か月の間苦しめることだけが許された。その与えた苦痛は、さそりが人を刺したときのような苦痛であった。」

11：1－2「1 それから、私に杖のような測りざおが与えられた。すると、こう言う者があった。「立って、神の聖所と祭壇と、また、そこで礼拝している人を測れ。：2 聖所の外の庭は、異邦人に与えられているゆえ、そのままに差し置きなさい。測ってはいけない。彼らは聖なる都を四十二か月の間踏みにする。」

13：5、7、14－15「5 この獣は、傲慢なことを言い、けがしごとを言う口を与えられ、四十二か月間活動する権威を与えられた。」「7 彼はまた聖徒たちに戦いをいどんで打ち勝つことが許され、また、あらゆる部族、民族、国語、国民を支配する権威を与えられた。」「14 また、あの獣の前で行うことを許されたしるしをもって地上に住む人々を惑わし、剣の傷を受けながらもなお生き返ったあの獣の像を造るように、地上に住む人々に命じた。：15 それから、その獣の像に息を吹き込んで、獣の像がもの言うことさえもできるようにし、また、その獣の像を拝まない者をみな殺させた。」

16：8「第四の御使いが鉢を太陽に向けてぶちまけた。すると、太陽は火で人々を焼くことを許された。」

19：8「花嫁は、光り輝く、きよい麻布の衣を着ることを許された。その麻布とは、聖徒たちの正しい行いである。」

20：4「また私は、多くの座を見た。彼らはその上にすわった。そしてさばきを行う権威が彼らに与えられた。また私は、イエスのあかしと神のことばとのゆえに首をはねられた人たちのたましいと、獣やその像を拝まず、その額や手に獣の刻印を押されなかった人たちを見た。彼らは生き返って、キリストとともに、千年の間王となった。」

8：3では主語が出ていませんが、この「与えられた」ということばを黙示録の中で使っているこれらの箇所では、主語はすべて「神」です。神が「たくさんの香」を御使いに与えたのです。何のために？⇒その目的は、その後に書かれています。「すべての聖徒の祈りとともに、御座の前にある金の祭壇の上にささげるためであった。」と。つまり、聖徒たちの祈りに合わせて天使たちもともに祈るためです。いっしょになって神の前に祈りをささげるのです。そのために、この聖徒たちの祈りが彼らに与えられるのです。彼らが一つになって祈る内容は何でしょう？神のさばきの約束が成就し、悪がさばかれて正義が為されること、勝利者である主が地上に再臨されることです。

すでに私たちが見て来たように、クリスチャンたちはそのことを祈っていました。「神さま、いつあなたの約束されたさばきが下るのですか？」と。その祈りに合わせて天使たちがいっしょになって祈るのです。「いつそれが成就するのですか？」「いつあなたが悪をさばいてくださるのですか？」「いつ

あなたの正義が為されるのですか？」「いつ勝利者であるあなたがこの地上に帰って来てくださるのですか？」と、そのような祈りを彼らはいっしょになってささげるのです。

4) 香の煙は、聖徒たちの祈りとともに、御使いたちの手から神の御前に立ち上った 4節

続いて、4節にはこのように書かれています。これも、先に説明したことをしっかり踏まえておくことが必要です。祭司はいけにえがささげられたところに行って、その祭壇から燃えている炭を持って来ます。聖所の中に入って至聖所に最も近いところにある香のささげものをする祭壇の上にその炭を置いて、香炉を置いて香をたくのです。その煙が神の前に立ち上っていくのです。その光景を見た祭司は、この祈りを神は聞いてくださったと悟るのです。というのは、この煙は神がその祈りを受け入れてくださったことを象徴したからです。そのことを覚えてこのみことばを見てください。香の煙が聖徒たちの祈りとともに御使いたちの手から神の御前に立ち上っていくのです。つまり、彼らの祈りは聞かれたのです。「いつですか？」と祈っていたその祈りがまさに今、答えられるのです。今から、そのさばきが下る、あなたがたが待っていたそのさばきが今から下ると、そのことをこの箇所が私たちに教えています。神の約束が今このように成就しようとしている、その様子です。

4. 祭壇の火で満たされた香炉を地に投げつけた 5節

ラッパのさばきが起こる前に起こる四つ目のことです。5節「それから、御使いは、その香炉を取り、祭壇の火でそれを満たしてから、地に投げつけた。すると、雷鳴と声といわずまと地震が起こった。」

1) 香炉を地に投げつけた

御使いは祭壇の上から香炉を取って、その中に炭を入れます。「祭壇の火でそれを満たして」とあります。つまり、その香炉の上に炭を乗せて炭で満たしてそれを彼らに地に投げつけると言います。皆さん、描けますか？それをヨハネは見たのです。先に見ているように、「香炉」は香のささげものをするために使われます。ところが、ここでは「さばきのシンボル、象徴」として使われています。

しかも、「祭壇の火」と記されています。「火」は神が神に逆らった神の敵たち、悪人に与えられる苦痛を象徴しています。思い出しませんか？ルカの福音書16章に書かれています。ラザロと金持ちの二人ともが死んで、金持ちはハデスに行きました。大変なところです。彼はそこでこのようなことを叫んでいます。16：24「彼は叫んで言った、『父アブラハムさま。私をあわれんでください。ラザロが指先を水に浸して私の舌を冷やすように、ラザロをよこしてください。私はこの炎の中で、苦しくてたまりません。』」と。神に逆らい続けた者たち、神があなたを愛してあなたのために完全な救いを備えてくださったにも拘わらず、その救いを拒み続けた者たちに待っているのはこの神ののろいです。大変な苦しみです。「この炎の中で苦しくてたまらない」と言います。

また、黙示録20：10にも「そして、彼らを惑わした悪魔は火と硫黄との池に投げ込まれた。そこは獣も、にせ預言者もいる所で、彼らは永遠に昼も夜も苦しみを受ける。」と書かれています。このことが神からの約束です。神は神に逆らう者たちに対して、救いを拒み続ける者たちに対して、大変な苦しみを約束されました。まさに、それが今起ころうとしているのです。それを「地に投げつけた」と、いよいよその日が来るのです。

2) 雷鳴と声といわずまと地震が起こった

・雷鳴と声 : すでに見ました。黙示録4：5に「御座からいわずまと声と雷鳴が起こった。」と書かれていました。つまり、患難時代における神のさばきを表わしていました。

・いわずま : これも神のさばきを表わしています。たとえば、イスラエルの民が神から律法をいただくとしていたとき、出エジプト記19：16-19に書かれています。神は厳しく命じられました。神から律法をいただくに当たって、モーセとアロンだけが近づくことができ、それ以外の者たちは近づいてはならないと。彼ら自身は身を清めなければならない、そのときに何が起こったのか？彼らは三日間それを行ないませんが、「16 三日目の朝になると、山の上に雷といわずまと密雲があり、角笛の音が非常に高く鳴り響いたので、宿営の中の民はみな震え上がった。：17 モーセは民を、神を迎えるために、宿営から連れ出した。彼らは山のふもとに立った。：18 シナイ山は全山が煙っていた。それは【主】が火の中であって、山の上に降りて来られたからである。その煙は、かまどの煙のように立ち上り、全山が激しく震えた。：19 角笛の音が、いよいよ高くなった。モーセは語り、神は声を出して、彼に答えられた。」、雷もいわずまも、そして、地震も起こりました。人々はその光景を見て恐れたのです。「神がおられる！」と。また、黙示録11：19にも「それから、天にある、神の神殿が開かれた。神殿の中に、契約の箱が見えた。また、いわずま、声、雷鳴、地震が起こり、大きな雹が降った。」とあります。神のさばきです。16：18にも「すると、いわずまと声と雷鳴があり、大きな地震があった。この地震は人間が地上に住んで以来、かつてなかったほどのもので、それほど大きな、強い地震であった。」と書かれています。

・地震 : 第六の封印のときに、大変な地震が起こることが書かれていました。ここにもそのことが記されています。ついに、神の怒りが神の敵たちに向けて下されるのです。

そして、8：6をご覧ください。「すると、七つのラッパを持っていた七人の御使いはラッパを吹く用意をした。」、ついに「ラッパが吹かれる」、その時が来たのです。ラッパのさばきです。そして、この後、7節からそのラッパが吹かれる様子が記されています。神の審判が下って行きます。どんなことが起こって行くのか？次回からそのことを見ていきます。

今日、私たちはラッパのさばきが下る前にどのようなことが起こるのか？四つのことを見て来ました。まだ、この救いに与っていないあなたに対して言えることは「悔い改めること」です。この日は近づいています。確かに、あなたは地上で満足した生活をしているかもしれませんが、でも、神はあなたに警告を与えておられます。あなたの罪はさばかれると。なぜ、この救いを拒み続けるのでしょうか？なぜ、この救い主を拒み続けるのですか？主イエス・キリストが備えてくださった完全な救いだけがあなたに罪の赦しをもたらします。なぜ、それを拒み続けるのか？神の警告を聞かなければいけません。必ず、さばきが来るとい警告を聞かなければいけません。もう、それはそこに迫っているのです。もし、まだ神に逆らい続けている方がおられるなら、あなたにとって今日が悔い改めの日、この救いをいただく日となることを心から願います。

救いに与っている皆さん、確かに、私たちはこの現場にはいません。この地上にはいません。神とともにいます。でも、考えてみてください。あなたの愛する者がこのようなところを歩いて行くということ。救いをいただいていなければ、患難時代は大変な時です。それを彼らは経験するのです。もちろん、私たちは人を救うことはできません。しかし、私たちは祈ることができるし、彼らに語り続けることができます。それが神が私たちに求めておられることです。結果がどうあれ、私たちはこの地上にあってまだまだ為さなければならない働きがあります。この福音のメッセージを語り続けることです。救いのメッセージを語り続けることです。なぜなら、イエス・キリスト以外に私たちの罪を赦すことのできる救い主はいないからです。

どうぞ、主があなたを励ましてくださって、この1週間もこのメッセージを携えてしっかりと出て行くように、そして、願わくは、このすばらしい救いに私たちの愛する者たちがだれ一人として漏れることなく、この祝福に与ることができるように、祈りをもって福音宣教にしっかりと励んでいきましょう。

《考えましょう》

1. 7人の御使いたちはどのような天使たちですか？
2. 「神の前に立つ」とはどういう意味でしたか？
3. 天のクリスチャンたちや天使たちが祈ったことは何でしたか？
4. 7つ目の封印に含まれるさばきを挙げてください。